

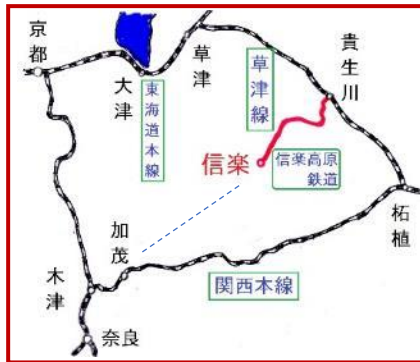
信楽高原鉄道に乗って陶芸の森を訪ねる（滋賀）

コロナ第7波もやや収まりを見せ、4か月ぶりの燦歩会です。前夜は曇りで放射冷却の冷え込みもなく気温は19.4度、快適な燦歩日和です。参加はビジターを1名迎えて、17名（男性12、女性5）。皆さんさぞ歩きたかったことでしょう。

午前10時JR草津線の貴生川（きぶかわ）駅ホームに集合しました。元来JRだった第3セクターの信楽高原鉄道はホームも共用、中央にICカード用のゲートがぽつんとありますが、文字通り行き来はフリーパスです。



信楽高原鉄道は貴生川駅から信楽駅まで、全長14.7kmのローカル線です。当初は点線のように関西本線加茂駅まで伸びる計画で、1933（昭和8）年に開業しましたが、戦時でもあり、信楽から先が建設されることはありませんでした。それどころか、1943（昭和18）年には”不要不急路線”としてレール・枕木の供出を迫られ運休。1947（昭和22）年の営業再開に当たっては、信楽町民からの枕木提供や工事への奉仕があったという事です。



信楽は言うまでもなく陶器の町、伝統産業会館では、様々な信楽焼を見ることができました。



左から茶器、大きな火鉢、今はあまり見かけなくなった筒状の湯たんぽ、呑み甲斐のありそうな徳利です。信楽焼は、奈良時代聖武天皇が紫香楽宮（しがらきのみや）を作る時に、瓦を焼いたのが始まりと言われています。日本六古窯（信楽・備前・丹波・越前・瀬戸・常滑）の1つです。

主に水瓶などが作られ、茶の湯が盛んになる安土桃山時代には茶道具の生産も盛んになり、信楽焼のわび・さびが愛好されます。江戸時代は徳利や土鍋など、生活用の器が作られ商業としても発達しました。大正時代から戦前までは、各家庭で愛用された火鉢が多く製作され、信楽焼の火鉢は国内販売の8割を占めたそうです。



また、温かみのある「スカーレット(緋色)」の発色も魅力といわれ、NHKの連続テレビ小説「スカーレット」の題名にもなりました。2019年後期の朝ドラ収録に使われた窯、工房も復元展示されていました。この展示は、来年3月末までだそうです。



新宮神社は奈良時代の創建といわれ、この一帯の産土神です。神前に控える狛犬も陶製でした。神社の裏手一帯に多くの窯元の工房が営まれ、窯元散策路として賑わっています。



新宮神社の鳥居の傍らには昭和天皇の歌の碑がありました。

「幼なとき 集めしからに 懐かしも しがらき焼の狸をみれば」

子供の頃信楽焼の狸を集めておられたとは意外でもあり、ほほえましく思われます。

1951（昭和26）年行幸の際、日の丸の小旗を持った信楽たぬきが沿道に並び、それをいたく喜ばれたのだそうです。

信楽焼の狸にはこんな発祥譚があります。明治時代、京都清水に修業に行っていた職人さんが、たまたま月夜の晩に狸が腹鼓を打つのを実見するという不思議な体験をし、帰郷後その体験を大切にして、たぬきの焼き物を作り始めたのだそうです。タヌキは姿も愛らしく、また「他抜き」の語呂から、商売繁盛、開運、出世、招福、金運向上の利益があるという事で、縁起物として人気が出ます。そして行幸の時以来、信楽の“たぬき”は全国区になったのだそうです。

滋賀県立陶芸の森は、陶芸をテーマにした展示館、研修施設、公園が丘陵地に広がっています。

昼食後に大狸と一緒に全員写真です。



信楽の燦歩のもう一つのテーマは、「紫香楽宮（しがらきのみや）」です。

奈良時代、聖武天皇はここ紫香楽の地に離宮を営み、短期間ですが日本の都にします。（詳しくは蛇足・補足に譲ります）その宮の跡へ、陶芸の森から旧道を2 kmほど北へたどります。このあたり標高はおよそ270m、川に沿った細長い平坦な盆地です。道は信楽高原鉄道と並行し、焼き物の町らしい光景が点在します。窯で焚くのでしょうか、山積みの薪もありました。



「紫香楽宮跡」は静かな松林の中にありました。この辺りはいかにも宮中を思わせる「内裏野（だいのりの）」という地名です。250 個を超える大きな礎石が並ぶ事が古くから知られていました。1926（大正 15）年に聖武天皇の紫香楽宮跡として、国の史跡に指定されました。



ただ専門家の間では、寺院の跡ではないかという意見もあって、1930（昭和 5）年 1 月に東大の黒板勝美、京大の濱田耕作、西田直二郎 三教授の下で学術調査が行われます。

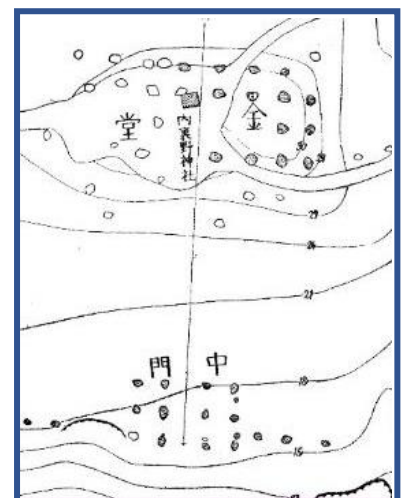
写真を見ると物々しい程の調査団です。

右手の内裏野神社前、大岩に座っているのが黒板教授です。

実務を担当し報告書を書き上げた肥後和男は、後に東京教育大学教授になります。

発掘と測量の結果、礎石の並びから、堂塔の伽藍配置が確認され、寺の跡であることがはっきりしたのです。

報告書の伽藍配置図は、金堂と中門の部分です。



現在も、松林の中に多くの礎石が並び、丘の中段に「中門跡」、頂上の祠横に「金堂跡」などの標柱が建てられています。

帰りの時間が迫ってきました。紫香楽宮跡駅に向かいます。

「紫香樂宮跡」駅発 15 時 03 分のワンマンカーは、発車後まもなく慰霊碑の傍らを過ぎました。往路にも気を付けて探していたのですが分からず、帰路でようやく目にすることが出来ました。1991（平成 3）年の衝突事故の慰霊碑です。5 月の 14 日、信楽発貴生川行き普通列車と、京都から乗り入れていた信楽行きの JR の臨時快速列車「世界陶芸祭しがらき号」とが正面衝突したのです。臨時列車は乗客で超満員の状態（定員の 2.8 倍）だったことから、42 名が亡くなり 614 名が重軽傷を負う大惨事となりました。この時信楽では「世界陶芸祭」が行われ、連日多くの人々が訪れていました。設備を増強して平常の倍ほどの列車を運行していたのですが、信号の不具合とその際にとった対応の誤りが事故を引き起こしたといわれています。



ほんの一瞬ですが、傍らを過ぎながら、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りしました。

* * *

相変わらずの蛇足・補足で失礼します。

彷徨の5年

聖武天皇は 740（天平 12）年 10 月 29 日平城京を離れ関東に行幸、以後恭仁京（くにきょう・京都府木津川市）を拠点に、紫香樂宮、難波宮（大阪市）と転々とします。結局 745（天平 17）年 5 月 11 日に平城京に戻りますが、この期間を日本史上「彷徨の5年」と呼んでいます。謎の行動の動機は、旱魃・飢餓・地震・疫病、政界の混乱等々、八方ふさがりの状況から抜け出し、心機一転新しい都で政治を始めることを願ったという事でしょうか。今日の私たちは、結局平城京に戻ることを知っていますが、当時天皇の命するままに右往左往した人々は疲れ果て、先行きに大きな不安を抱いたことでしょう。

この間紫香樂は離宮でしたが、天皇の滞在は次第に長くなり、甲賀宮（こうかのみや）と呼ばれるようになります。また甲賀寺では大仏造立の準備が始められます。そして 745 年の元日には「紫香樂を新京とする」と宣せられ、信楽は日本の都になるのです。しかし移転を繰り返した官人たちの間に政治に対する不満が高まり、異例ともいえるアンケート調査の結果、官人たちは平城京への帰還を願い、彷徨の5年は終わりを告げることとなります。

二つの紫香樂宮跡

では、紫香樂宮の宮殿はどこにあったのか？ 内裏野地区に代わって浮上したのが、1 km ほど北の宮町地区です。1973（昭和 48）年度の田の区画整理で直径 35 cm ほどの柱の根が出土していましたが、その時は注目もされず柱根も焚き付けにされようとしていました。その情報が教育委員会に寄せられ、昭和～平成にかけての調査で柱根も多く発掘され、「年輪年代測定法」による調査が行われます。幸いにも樹皮のついたものもあって、一番外側の年輪から、その木が伐採されたのが 743 年の秋と分かったのです。



紫香樂宮の造営は 742（天平 14）年 8 月から 745（同 17）年 5 月までですから、ピタリ一致です。

一方、2000（平成12）年の発掘調査で、宮町の盆地中央で長大な建物跡が見つかり、宮殿の跡である事がはっきりします。宮町地区は2005年に国の史跡「紫香樂宮跡」に、75年遅れて追加指定されました。いま全部で5つの地区が史跡に指定されています。

謎の歌木簡

「歌木簡」とは和歌の記された木簡。大阪市立大学の栄原永遠男（さかえばらとわお）教授が提唱した新しいジャンルです。木簡学会の会長である栄原教授によれば「歌木簡」はこれまでに14点出土。その内9点がこの「難波津」の歌です。

「難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花」
難波の港、梅の花の咲き誇る爛漫の春の訪れを寿ぐ歌です。

紫香樂宮跡（宮町地区）からは、7200点を超える木簡と削り屑が発掘されました。その中の2片の歌木簡によって和歌の歴史が書き換えられることとなります。2片のサイズは、幅2センチ2ミリ、厚さ1ミリ。長さ14センチと7センチ9ミリで、元は一つのものとして見られていました。ボロボロになった物差しといった感じの大きさです。

一片の文字は「なにはつに」と読まれ、またもう1片は「□やこ」と読まれていました。□は読み取れなかった部分ですが、これならば2片を合わせて、あの歌だろうと考えられたのです。

「難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今は春べと 咲くやこの花」 「なにはつ」は分かりやすいのですが、「やこ」は2か所あり、どちらに当たるのかは不明でした。

2007（平成19）年12月、紫香樂宮跡調査委員でもある栄原教授は、歌の観点からこの木簡を再調査し、大変なことに気付くのです。「なにはつに」の裏にも文字が書かれていて「あさかや」と読めたのです。教授は「虚を突かれてあわてた」と記しています。この削り屑は極めて薄く、裏に字はないものと考えられていたからです。「あさかや」で始まる和歌として教授の心に浮かんだのは、万葉集巻16-3807の歌でした。

「安積香山 影さへ見ゆる山の井の 浅き心を吾が思はなくに」

安積山（あさかやま）の影さえ見える山の湖水の、その安積山ではないけれども、決して浅い心で思いをかけたりしません。 葛城王に対する采女の歌です。

教授は急遽、奈良文化財研究所のスタッフと共同で解読を進め、また大きな進展があります。

「□やこ」と読んでいた部分が、実は「るやま」であるという結論でした。これならば先ほどの安積山の歌の_____の部分に該当します。いままで「難波津」の下に続くと考えられていた部分が、実は裏側の「安積山」に続く部分だったのです。こうして、「難波津」と「安積山」二つの和歌が、この2片（元は一つ）の木簡の表裏であることが確認されたのです。

これだけでも大発見ですが、まだまだ続きがあるのです。紫香樂宮の木簡に記された年紀は、天平13年～17年に限られています。これは紫香樂宮の存続期間とほぼ一致し、「なにはつ」

「あさかやま」の木簡もこの年代のものと考えられます。一方、万葉集は天平17年から数年の間に成立したとされています。とすると、「あさかやま」の木簡の字を書いた人は、万葉集を見てこの歌を書き写したのではない事となります。今日と異なり、万葉集が出来たからと言って

人々がそれを直ちに目にできた訳ではありません。この歌が万葉集とは別に、それよりも前に、人々の間に流布していたことを証明しているのです。

実はこの「あさかやま」と「なにわつ」の2首は、ただの2首ではありません。10世紀初めに編まれた勅撰和歌集「古今和歌集」の冒頭にも登場する有名な2首なのです。紀貫之の書いた序文にこうあります。「難波津の歌は……、安積山の言葉は……、この二歌は、歌の父母のようにてぞ手習う人の初めにもしける。」歌の父と母と呼ばれ、初心者習字にも使われる。それほどにポピュラーだということです。

平安時代に一対と考えられていた2首の和歌、それが紫香楽宮の時代に既に木簡の表裏に書かれていた。この二つの歌をセットと考えることが、150年もさかのぼる天平時代にすでにあった、ということになるのです。

* * * *

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。メンバーは現在33名です。
入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、毎月第4日曜日に歩いています。

今後の予定は、

- ◎天理軽便鉄道跡を歩く（奈良）
- ◎浪花文学散歩（大阪） ◎寿長生（すない）の郷（滋賀） ◎五花街を巡る（後半）（京都）

ただし、コロナの推移に合わせて、柔軟に対応して行きます。

参加ご希望の方は、会務担当 山村恵一にご連絡下さい。

（電話：090-1484-4403、メール：y-yamamura@ares.eonet.ne.jp）

コロナに注意しながら、一緒に気軽に楽しく歩きましょう。 （写真・文 生島 幸弥）